皆さん、本日はご卒業・ご修了、まことにおめでとうございます。会場にお入りいただくことはできませんでしたが、保護者の皆様方におかれましても、今日に至るまで大学に多大なご支援をいただきましたことに、深く感謝申しあげます。

特に今年卒業を迎える多くの皆さんは、複数学部体制による卒業の第一期生となります。皆さんが入学された頃、おそらく順調に大学生活をスタートさせたことと思いますが、第3学年となって、まさにこれから先輩として大学生活を謳歌しようとした矢先に、コロナ禍によってさまざまな制限を余儀なくさせられたことと思います。充実した学生生活を期待して入学した皆さんが、十分に大学生活を謳歌し、満足してこの日を迎えられているか、学長として正直なところ少し不安もありますが、この二年間、厳しい状況をそれぞれが受け入れ、工夫や努力を重ねて今日の日を迎えることができたことは、同窓会や保護者会の皆様の強いバックアップと、何より皆さんの協力によるものであると、深く感謝いたします。

さて、新型コロナウイルスは、あっという間に世界中に広がり、多くの犠牲と共に、深刻な被害をもたらしています。国境を越え、民族を越えて、このウイルスは人類すべてに平等に混乱をもたらし、いまだアフターコロナが見えない状況にあります。実は私は、コロナ禍が蔓延した当初、淡い夢をもっていました。それは、あらゆる国、人類すべてが結束し、この困難に立ち向かうだろうという夢でした。国境も人種も越えて広がるこのウイルスには、人類は一丸となって立ち向かわなければなりません。したがって不器用でもそのような道が模索されるのだろうと、期待をしていました。しかし残念ながら、世界はそのようにはなりませんでした。

コロナ禍が、人と人とのつながりの大切さを教えてくれたことも多くあります。しかし、ウイルス震源地を巡っての情報は激しい差別やヘイトへとつながり、またウイルスと戦うための共通の武器であるワクチンも、世界中で争奪戦が起こり、強い国が弱い国を押しのけてワクチンを獲得するということも成立してしまっています。もちろん私自身も、おそらくその強い国の一国民として、そのような行動の当事者であることは間違いありません。

人類が結束してコロナ禍に立ち向かうのだろうと、私が淡い夢を持っていたのには、理由があります。私は小学校や中学校で、人類の差別の歴史、戦争の歴史を学ぶたびに、この愚かな争いがいつ終わるのか、幼いながらにいろいろ考え、漠然とひとつの結論を持っていました。それは、人類全体に対する共通の敵が、予想もしないところから現れた時なのだろうという考えです。地球外生命体からの攻撃、あるいは見えないウイルスの脅威、これらを前にした時にはじめて人類は一致団結し、ひとつになるのだと考えていました。これは私一人の考えではなかったと思います。現に多くのSF作品には、人類が見えない敵に対して「地球防衛軍」なるものを結成し、一丸となって戦うという様子が描かれてきました。しかし残

念ながら、周囲を見てすぐにわかる通り、人類はひとつになることはありませんでした。

さらに恐ろしいことに、このコロナ禍の中、現在東欧地域では、現代のものとは思えない戦闘が行われ、多くの市民の命が、特に、国や大人の利害とはまったく関係のない子どもたちの命が、無残にも奪われています。今日は私たちの京都は幸い雨です。「幸い」と言ったのは、ミサイルや爆弾が降ってはきていないという意味です。雨で残念な思いももちろん持つでしょうが、しかし間違いなく、東の彼方の世界では、文明の最先端技術を駆使した殺戮兵器が、人の意思によって、空から降りそそぎ、多くの命を奪っているのです。

皆さんの卒業という喜ばしい日に、このような送る言葉を申しあげなければならないことはとても残念なことです。希望ある将来を明るい言葉によって送り出すべきだとも考えました。しかし、世界の現状に目を閉ざして送り出すことはできないと思い、このような内容をお伝えすることにいたしました。小さな社会と大きな世界、卒業される皆さんには、この両方の世界を見つめることを大切にしてもらいたいと思います。皆さんには、この卒業を迎える喜ばしい日に、感謝の中にも未来に対する希望を持って卒業して欲しいと思いますが、一方で、この恐ろしい戦争の世界、私たちの愚かさから目をそらさずにいてほしいと思います。なぜなら、仏教の精神を大切にする大谷大学にとって、他人の苦しみに関心を持たないことほど恐ろしいことはないからです。

東欧での戦闘は、現在のところ限られた地域内で展開されていますが、経済活動による制裁の応酬は、今や世界中で起こっています。もはやこれは「新しい形での世界大戦」であるとも言えます。武器を置いて、経済制裁の応酬によって争いを続けるならば、人類も少しは賢くなったのだろうと言えるかもしれません。しかし、経済戦争は今後当然、人の生命をも脅かし、その時、経済戦争は容易に武器を持った戦いへと転落していくでしょう。私たち人類は、地球上のあらゆる生命のなかで最も優秀であると考えているようですが、間違いなく最悪であり最低な生き物です。一つになるチャンスを失ったばかりか、愚かしい殺戮を繰り返す、この地球上で最も愚かしい生き物なのだと言えます。

最後に、ブッダの言葉をご紹介します。卒業式には相応しくない言葉かもしれませんが、争いをやめない人間に対して、ブッダは次のような言葉を残しています。

怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みを棄ててこそ息む。これは永遠の真理である。（ダンマパダ）

憎しみを憎しみによって返したならば、争いと戦いは止まることがありません。これは、人間の愚かしい戦争の歴史が証明するところです。やられたらやり返す、このような憎しみ

の連鎖は、遠い過去から繋がって現在にまで至っています。このような愚かしい争いの連鎖はいつ止まるのか。ブッダは、それは、わたし自身が憎しみの心を捨てる時なのだと言いました。

大谷大学は東本願寺に設立された学寮から数えて 350 年以上、東京での開学から数えても 120 年の歴史を刻んできました。仏教精神を基に人間教育を行い、相互に敬愛する純真な人格を持つ人間を育てようと歴史を重ねてきました。しかし残念ながら、今申しあげたような状況が世界の現状であり、人間の実情です。相互敬愛の社会に近づくどころか、私たちは過ちを繰り返し、文明はむしろ劣化していると言えます。その意味で大谷大学は 120 年以上にわたって仏教教育を行ってきましたが、大谷大学には世界を変える力はありませんでした。私たちには到底、世界を変える力はないのでしょう。しかし大谷大学は、仏教は、世界を変えることはできませんが、一人の人間を変えることはできます。その一人とは、まずは私自身です。皆さんお一人お一人です。世界を変えるという願いは、実は傲慢で恐ろしい野望であるとも言えます。まずは私を変える、一人が変わる。これも決して容易なことではありませんが、自分が変わること、一人の人間が変わることによって世界が変わっていく、そのことを願って、これからも大切な教育と研究を続けていかなければならないと思っています。自らの怒りを抑え、寄りそう知性を発揮して生きることが出来る自分に、私たち一人一人がなれるかどうか、なろうとするかどうか、そこに実は人間の未来もかかっているのだと思います。

その意味で、争いが絶えず、かえって劣化しているのではないかと危惧される世界を前にしても、私たちは諦めないでいることができます。それは、私たちが大切にすべき教えがそこにあるということと、そして何よりも、今眼の前に、これから社会を形成していってくれる皆さんがいてくれるからです。大谷大学が人間を諦めないでいられるのは、皆さんがいるからです。それぞれの場で、それぞれの生活を大切にしながら、世界に顔を向け、あるべき方向性を問い、わずかでも声を発して、他者と共に歩む道を探していってほしいと思います。「怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みを棄ててこそ息む。」という、お祝いの場にはふさわしくない言葉かもしれませんが、今の歴史的状況を記憶にとどめていただきたい意味も込めて、皆さんへの送る言葉としたいと思います。

迷ったらいつでも母校に戻ってきてください。仲間がいないと感じたら、大谷大学に帰ってきてください。大谷大学はこれから生涯皆さんの母なる大学、母校です。卒業生であると言えば必ず誰かが迎え入れてくれる、ここに残る私たち教職員、先輩同窓生一同、そんな大学でいられるように努力を重ねていきます。皆さん、本日はご卒業・ご修了、まことにおめでとうございます。